

カリフォルニア滞在記 (三)

—忘れ得ぬ人々　そして出来事—

岩立　京子

私はカリフォルニアで生まれて初めて「空」というものに出会いました。あまりにも壮大で美しい空に何度足を止め、何度感嘆のため息を漏らしたことでしよう。特に、日が昇る前後の空一面に広がる白いちぎれ雲が薄ピンク色の背景にうつすらと浮かび上がってきたかと思うと、背景があつという間に濃いピンク、そして黄色から

明るいブルーへと変化し、強烈なコントラストで浮かび上がってくる様は、言葉ではたとえようもないほど美しく神秘的でした。南部では洪水や山火事などの災害が起

きたりしていましたが、カリフォルニアの空はどこまでも悠然としていたのでした。

カリフォルニアでの日々の生活が落ち着いてくると、こちらで暮らす人々の生活が垣間見えてきました。サバティカル（研究休暇）で外国に住む場合、大学のキャンパス内かごく近くに住み、大学と自宅との間を往復する方が多いと思いますが、私の場合、バスや電車を乗り継いで二時間もかけて通学したため、ごく一般の市民の生活に触れることが多く、これも一つの収穫であったと思

います。バス停でバスを待つ間のおばさんとの学校談義、朝の電車の通勤ラッシュでひしめき合う人々、市電の改札口近くで寄付箱の前にチェロを弾く初老のストリートミュージシャン、「小銭を」と空の紙コップを差し出してくるホームレスの人、あふれんばかりの食材を入れたスーパーの袋を両手に堂々と母国語を話しながら帰路につくエネルギーシユな中国人、歩行器を押しながらゆつくりと歩く高齢者と介護の人、英語、広東語、スペイン語などが錯綜する道行く人々の会話……、私はこういった人々との出会いを通して、どこの社会にも人々の日々の暮らしがあり、それぞれ一生懸命に生きていることをあらためて感慨深く感じました。

保育者の学び合いに参加して

渡米後二か月経った十月の終わりに、ミルズ大学で全米附属学校連盟（NALSS: National Association of Laboratory School）の地区大会がありました。担当者に「私も出られるか？」と尋ねたら、「これは大きな組織

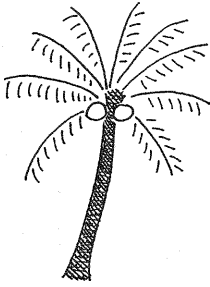
の会議で会員でないと出られない」と言われました。

「あなたは出られない」と言われただけなのにがっかりしてしまい、黙って引き下がる自分が後でとても情けなく思えました。「今、会員になることはできるか？」とか「何とか出られる方法はないか？」と食い下がればよかったと後悔し、その後、ミルズの特別研究員であるキャサリン・ルイスに相談すると「それは是非出るべきよ、出られると思うよ」と言われ、担当者に許可をもらえるように動いてくれました。こういった経験を重ねながら、私は徐々に自分の意思を言葉ではっきりと表示することの意義を理解していきました。

NALSSは、公・私立を問わず百以上の大学附属のプレスクール、小学校、中学校が団体として加入している他、二百五十人を超える個人会員をもつ組織です。NALSSの目的は、①教育改革において附属学校の貢献を高める ②附属間のよりよいコミュニケーションを図る ③附属が直面する問題の解決を促進する ④附属学校プログラム ⑤附属学校の改革に貢献する活動を組織する

連盟の地区レベル、州レベルでのネットワークを開発する
⑥ 優れた教育サービスのプログラムを会員に提供する
⑦ 出版・メディア関連のサービスを会員に提供するという七つで、一年に二度の会議をもち交流しています。

平成十七年度の地区大会はミルズで行われ、テーマは「スチューデント・ティーチャーのメンタリング ― 私たちの実践を洗練させること ― 」というものでした。カナダやアメリカ各地から五つの大学が参加し、それぞれの大学が行っているメンタリングの目的、プロセス、評価などについてメンターする側の立場から事例が報告され、メンタリングを行うことでメンター教員自身が何を学べるか、メンタリングによって新たに生じてきた疑問などについてディスカッションが行われました。
発表者はすべて附属学校の先生で大学との連携による研究を進めていると



ころが多く、みな研究の構造を明確に示したり、理論的枠組みや参考文献を紹介したりして、かなり活発な議論が展開されました。

私はメンタリングという考え方そのものが新鮮で必死でメモを取り、全ての内容を理解したいと注意集中して聞いていましたが、話し手によっては発音が聞き取りにくく五割程度しか聞き取れないことがありました。休み時間に、ミルズのヘッドティーチャーのクリスティンから「あなた、聞いていてわかる?」と聞かれたので「時々聞き取れず、理解できないことがある」と応えたら、その後、何人からも「あなた、英語がわかるの?」「私たちの言っていることがわかってるの?」と質問されました。アメリカに長く滞在する知人から、こちらでは「わからないときはわかるように積極的に質問したり、わかる範囲で議論に参加しなければならぬ。わからないことをそのまま放置するということは聞き手としての責任放棄と解釈される」と聞いていましたが、それを実感したのはこのときでした。一日中、神経を集中させて聞いて

いたので、全員の発表が終わるころには頭がくらくらするほど疲れてしまいました。雑談をしても人々が日本語で話す内容が自然に耳に入ってくるように、英語も聞き取れればどんなにいいのと思いました。

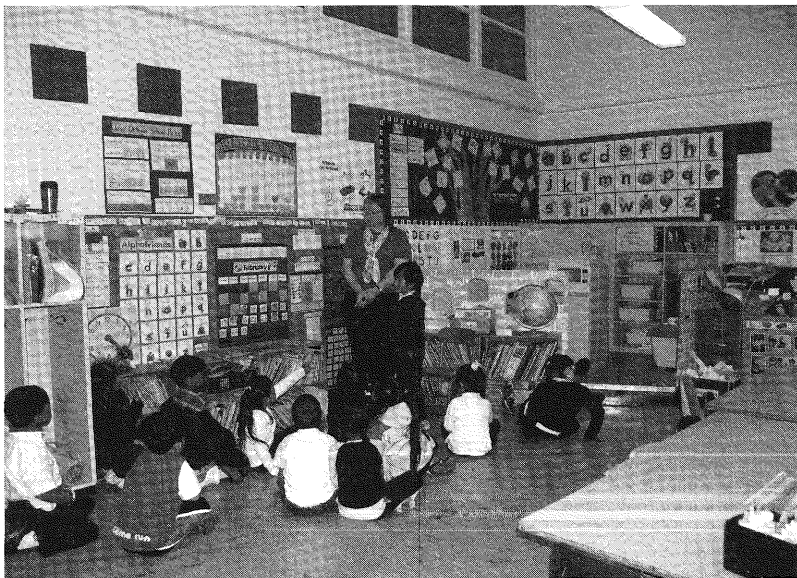
ジヨセ・オルティガ小学校のこと

娘が通うジヨセ・オルティガ小学校は、児童数二百数十名の小規模な学校です。英語と広東語とのバイリンガルプログラムを推進し、中国の文化的行事などが組み込まれ、広東語を母国語とする児童には特別プログラムが展開されていました。娘のクラスは四年生の「ルーム203」で担任はワシントン先生でした。ワシントン先生と教頭先生は、入学当初から、周囲の友だちに馴染めるか、勉強は理解できているかなどについて細かく配慮してくださり、娘の隣の席には明るく面倒見がよさそうな子を配置し、リーディングについては各ストーリーごとのCDを貸してくれました。また、定期的に行われる子どもの表彰式では、英語のシャワーのなかでほとん

ど理解できずに過ごしている娘を「フレンドシップ」に貢献したとして表彰してくださいました。娘は算数や体育の一部を除いていつも自己發揮したいのにできない思いを抱いていただけに、表彰はとても嬉しくまた誇らしかったようです。表彰というのはいわゆる「アメとムチ」のアメにあたるものですが、何らかの形で一人ひとりの良さが認められ、ほめてもらうことによって子どもたちは自分に誇りをもてるようになりたいと思いました。また、ハロウィーン・パレードやクリスマス・パーティーが全校で催され、先生も含めてほとんどの子どもが仮装を楽しんだり、歌やダンスを披露して親子共々楽しく過ごしました。アメリカの学校は個人主義に満ち、全体の行事は少なく、教室は競争的で、典型的にはアメやムチ、タイムアウトなどを駆使し、行動主義の原理で教育が行われているという先入観を私はもっていましたが、ケアリング・コミュニティをスローガンとして掲げている娘の学校に関しては、知的な学習や競争、個人の達成だけでなく、協力や思いやりが重視されているようでした。

ジョセ・オルティガのキンダークラスを観察しました。遊び中心の総合的な活動ではなく、教科を中心として活動が組み立てられていましたが、幼児教育と小学校教育をつなぐかのように、絵本や歌、遊びなどを取り入れながらうまく教科の学びへと導いていく先生の力に感じました。私が二十八年前にデヴィス市で見たキンダークラスとは全く異なっており、これが時代の差なのか、学校コミュニティの風土の差なのか、教師の個人差によるものかはわかりませんが、私が渡米前に抱いていた小学校のキンダークラスのイメージとは大きく違っていました。

アメリカに来てからしばらくは、「アメリカは」だけれど、日本は「だ」とあらゆることに対し一般化して比較しがちでしたが、しばらくすると「アメリカは」という言葉を使えなくなりました。そこには、多様な人種、多様な価値観と行動様式、多様な教育実践があり、典型というものを見いだすのが難しいことを知りました。身体で感じたこの「多様性」は、アメリカでの最も大きな



▲キンダークラス

私の学びであったかもしれません。

十二月に担任による保護者の個人面談がありました。

個人面談はどのようなものだろうと楽しみに行ってみると、担任がサンフランシスコ教育委員会指定のスチューデント・プロGRESS・レポート用紙を指し示しながら「アヤカはリーディングは難しいが、スペリングテストでは大きく進歩した。英語を通して理解するのはまだ難しいけれど、いつも一生懸命にやるがんばりやさん。日本だったらさぞかし勤勉な子どもでしょう」などと、学習の様子や意欲、態度などについて大変丁寧に説明してくれました。その用紙は評定の他に担任のコメントがびっしりと書き込まれた大変興味深いものでした。説明終了後に、説明を受けたことを証明するサインを求められ、こちらでは説明責任をしっかりと果たすことが教師に求められていると思いました。私は日本で雑誌のような個人面談の内容に物足りなさを覚えたことを思い出し、ジョセ・オルティガで経験した個人面談がとても新鮮に思えました。

娘が二月末に日本に帰国することをワシントン先生がクラスのみんなに伝えると、多くの子どもがため息をついてがっかりしたそうです。ワシントン先生の発案で子どもたちが書いてくれたお別れのカードには心のこもったメッセージや絵がたくさん描かれていました。子どもたち一人ひとりの特性はもとより、ワシントン先生の人柄や子どもたちとのかかわりがすばらしく、娘がこのクラスで学べてよかったと心から思いました。

公立学校の統廃合

ジョセ・オルティガ小学校は、サンフランシスコの他の学校と同じく、統廃合の対象とされていました。校長先生をはじめとして教員、保護者は何度もミーティングをもち、存続に向けて運動を展開していました。サンフランシスコ市の教育委員会は生徒数の減少で、現在の全ての学校の運営は今後厳しくなるとし、公立校の大きな再編を試みようとしていました。サンフランシスコ市では毎年千人のペースで生徒数が減少しており、今後五年

はこの状況が続く見込みであることを、今回の再編で目標額の約半分、二百四十万ドルの予算削減が見込めると報道しました。各学校は存続に向けて闘いましたが、一月十九日の教育委員会の投票で、二十九校のうち三校を閉鎖、四校を再編、五校の場所を移動、二校はチャータースクール（オールタナティブスクール）へ変更とし、残る十五校の存続が決まりました。閉鎖が決まったある学校では、親が子どもに登校を拒否させたりして激しい抗議行動を行ったことが新聞で大きく報じられました。閉鎖リストに入っていたジョセ・オルティガも、学校で何度もPTAの会議をしたり、教育プログラムのすばらしさをアピールしたり、保護者が統合反対の投書を地区の行政官に送ったりしていました。結果的に一年間の期限で存続できることになり、全校朝礼でそれが報告されたとき、先生も児童も「ビクトリー！」と握り拳を高くかざし、歓声をあげる姿が見られました。行政改革や少子化、子どもの地域偏在などの波はここにも容赦なく押し寄せ、生き残りをかけていろいろな改革が行われていました。

子どものために何かをすること

娘は現地校と同時に、毎週土曜日、日本語補習校に通いましたが、そこで、母親がサンフランシスコ交響楽団のバイオリニストである友達ができました。こちらでの生活に不慣れな私たちにご夫婦でいろいろと助言してくださったことをきっかけにして、毎年、開催される「Deck the Hall」という子どものためのクリスマスコンサートに招待していただきました。Deck the Hallというのは、有名なクリスマススの歌の歌詞から取ったものです。

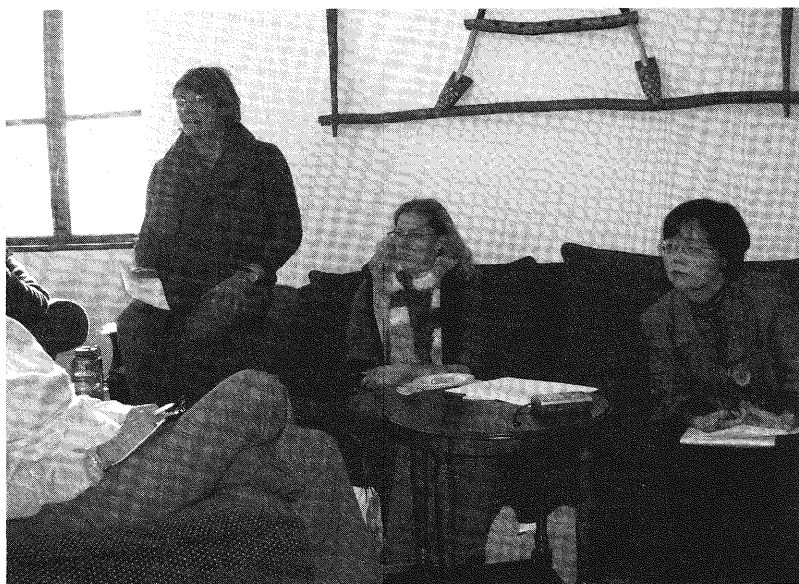
コンサートの当日、会場はきれいなドレスやスーツでめかし込んだ子どもと親であふれんばかりでした。こちらの人はパーティーとなると大層おしゃれをして楽しむと聞いていましたが、ペチコートでふんわりとなびくロングドレスの女兒やスーツに真っ赤な蝶ネクタイを決めた男児がちよつとすましてホールにいました。

会場には各々個性的で、ロビーの天井に届くほどの大きなクリスマスツリーがいくつも飾られ、それらはみん

な様々な団体から寄付されたものでした。

コンサートが始まる前に、様々なイベントが企画されていました。子どもが楽しめるようにクリスマスカードの手作りコーナー、パスタネットレスのコーナー、絵本を無料で配るコーナーなどのお楽しみコーナーや、各企業からのドネーションのドリンクやキャンディー、ドーナツなどが提供されました。

コンサートは、サンフランシスコ交響楽団によるクリスマスメドレーで始まり、子どもも出演する劇、そして優雅なサンフランシスコバレエとチビツ子バレリーナの踊り、そして最後には、クリスマスソングの大合唱と盛りだくさんのプログラムでした。すべてがすばらしく、また楽しく、これらが多くの企業、団体からの寄付によって行われていることに驚きを感じました。この国は寄付を積極的に募り、大胆に資源を集め、不可能を可能にしていく国なのかもしれないと思いました。私は子どものために何かをするということは、正にこういうことなのかと勇気をもったような気がしました。



▲ランチタイムセミナー

それぞれのサバティカル

サバティカルの初期には生活その他の新たなシステム、人間関係のなかで適応しようと夢中で過ごしましたが、中頃からは保育に関する学びに直接つながる経験の連続でした。ミルズのチルドレンズスクールの先生や院生、教員とともに日本の保育ビデオを見ながら八回に渡って語り合ったランチャタイムセミナー、「理論と実践」という大学院の授業やイブニング・スピーキング・イベントでの発表と鼎談、そしてそのかたわら、UCバークレイ、スタンフォード、公立学校のキンダークラスなどの観察の機会を得ました。それぞれ特色ある保育・教育を行っていて、自信をもって保育・教育を語り、積極的に問いを発してくる保育者の姿は印象的でした。

サバティカルの使い方はそれぞれ異なり、研究者と交流しながら研究をデザインする人、計画に基づいてデータをしっかりと取る人、実際の学校や機関の視察を中心に実態を調査してくる人、ゆつくりと書物を読んだり執

筆をする人などがあるのでしよう。私は実際の保育・教育現場をこの目で見たい、外国の教員養成システムの現状について知りたい、そして、それを通して保育・教育に関する自らの考えを問い直したいという強い思いがありました。ミルズを中心にいろいろな保育者、研究者と出会い、保育事例をもとに話し合うことを通して、これまで当たり前だと思ってきたことを根底から揺さぶられるような質問を受けたり、大変興味深い考え方に会ったり、考え方や方法を比較することによって日本のそれらの意義を再確認できたように思います。

多くの人々と出会い、語り合えたこと、そして、今後の継続的なかわりにつながる関係を構築できたことは、私にとって大きな収穫でした。私や私の家族がアメリカで出会った全ての人々、かわりに感謝しつつ、滞在記の筆を置きたいと思います。

(東京学芸大学)

☆この連載を終わります。